

NON NOVEL



NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた小説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL-107

長編冒険小説 黄金の罫

¥650

昭和54年9月30日

初版第1刷発行

著者	田中光二
発行者	伊賀弘三良
発行所	祥伝社
	〒101 東京都千代田区神田神保町3-6-5
	九段尚学ビル
	電話 03 (265) 2081
発売	小学館
印刷	萩原印刷 製本 明泉堂

長編冒険小説

田中光二
伊金の罾わな



NON NOVEL

祥伝社

目次

プロローグ
*
7

第一部
*
戦いの伝説
*
9

第二部
*
コマンド誕生
*
61

第三部
*
北岳の虎
*
99

第四部
*
燃える要塞
*
151

第五部 * 最後の賭け * 209

エピソード * 223

プ ロ ロ ー グ

巨大なけものは、曉闇きようあんの底をひっそりと歩いていった。

全長二・五メートル近く、体重三百キロに達する、成長し切った牡おすだった。学名バンテール・チグリス。アジア産の最大の猛獸、すなわち虎である。

岩頭をとどころ露出させた凍こてついた谷の雪は、かたく緊しまっております、けもの分厚い肉趾にくしは、ほとんどその痕跡を残さなかった。

まもなく、夜が明ける。けものは、狩りの時間が終わろうとしていることを悟さとっていた。彼ら一族をあれほど神経質にさせていた雷のような物音が、また日がな一日始まる。

しかし今は冬で、凍てついた山々には、めぼしい獲物は見当たらなかった。夜を徹して狩りを行っても、野ウ

サギ一匹捕えられない日が続いていた。

彼は飢えており、そのために鋭く研ぎ澄とまされた嗅覚が、谷の奥から漂ただよつて来るかすかな死臭をとらえた。ふつう虎は、死肉を漁あろうとはしない。しかしあまりの飢えが、彼にその源を辿たる気を起こさせた。

それは、この冬が始まってから、山のそここでしばしば嗅いだ匂いだった。雷のような音と閃光、そして炎症が上がつてしばらくしてから、きつとその匂いは立ち昇のぼってくる。

ふつうは、人間たちによって取り片づけられるらしく、すぐに消えてなくなる。だが稀には見捨てられたままの死体があつて、きびしい寒気に凍りつきながらも、ゆっくりと腐くっていくのだ。

——虎は体をめぐらせると、谷の斜面を奥へと下り始めた。かすかに射し染めた曙あけぼのの光が、その美しい褐色と黒の縞しまを浮かび上がらせた。

そこから二百メートルほど離れた向かい側の稜線の上に、二つの白い人影がうずくまっていた。その一つは手元に小さな丸いレンズの反射をかがやかせていた。レン

ズは、魅せられたように虎の動きを追っていた。

ふいに風向きが変わり、稜線の上の影の匂いを、風は虎に送った。けものはしなやかに跳躍した。一気に谷をよぎり、雪をかぶった松の茂みの蔭に吸い込まれ、消えて行った。

白い防寒帽、ヤッケ、手袋に身をかためた二人の兵士は、体を起こした。二人とも白人で、頬が寒さのために紅潮していた。双眼鏡を握っていた兵士は、相棒をぎこちなく振り返った。彼の頬の赤みは、寒さのためばかりではなかった。少年のように、興奮をむき出しにした笑いを彼は浮かべ、その笑顔が、朝日に当たってかがやいた。

彼の名は、マクリーンといった。

第一部 戦いの伝説

郷一人は、モアをくわえると、カシミアのジャケットをまさぐってカルチュの金張りライターを取り出し、火を点けた。

そのテーブルに坐ってから、何本目の煙草かもわからなくなっていた。ゲームに集中すると、他のことがわからなくなる。その集中力の強さこそが、ゲームにおける勝負強さを決定するといっている。——ただ、相手に吞まれていないことを示すために、煙草を喫うポーズが必要だったのだ。

今までのところ、彼の集中力が、ディーラーの運と技術を上回っているといえる。ディーラーはこのカジノの他の職員と同じく若い女で、この国の女に特有の、白磁のような肌に細面の顔立ち、ほっそりとした姿をしている。大胆なミニスカートと胸の大きくあいたブラウスで粧っている姿は、まるで小娘だ。

だが彼女たちをあなどってはならないことを、郷は知

り抜いていた。彼女たちはことごとく、国立大学を卒た才媛だが、この国営のカジノで働くためには、きびしい倍率の試験を突破しなければならないのだ。そのうえでディーラーに必要な技術と、「運」を開発すべく猛訓練が課される。

彼女がそこにいることそれ自体が、彼女の強運を物語っているといっている。プロがプロと呼ばれるには、それだけの裏付けがあるのである。

郷はそのすべてを知っていた。だからこそ、ルールブックや他のゲームには目もくれず、このブラックジャックに的を絞ったのだ。ブラックジャックはつまり、ディーラーに代表されるカジノと客との一騎打ちだ。二十一に達するカードを引くかそれを超えるかの、しごく単純なゲームであるゆえに、客が勝ちをおさめることはむずかしい。たとえ最初に旗色がいいにせよ、時間が経つにつれ、ディーラーの運を引き込む能力が、客のそれを上回る。大勝することは、まず不可能に近いのだ。

そのリスクこそが、逆に郷をブラックジャックのテーブルに引き寄せていた。いいかえれば、彼は、賭博を自

己に対する挑戦と受け取るタイプだった。

——今、郷の前には、高額ウオンのチップが百枚近く積み上げられている。ざっと数えても、二百万ウォン……つまり、百二十万円ほどはあろう。一時間かけて、五十万の元手をようやくそれまでにしたのだ。

最初、テーブルには他に二人の客がいた。一目で団体旅行の連れとわかる中年の男たちで、郷の快進撃ぶりを見て、そのツキにあやかろうとしたらしい。だが郷がツキが下火になったと見てほどほどに遊んでいる時も、夢中になって張り続け、たちまち裸になってしまった。——以来、そのテーブルは郷が独占するかたちになった。しかし背後の見物人はしだいにふえ、ついに十人を超えるまでになっていた。

郷は、一口吸ったモアを、灰皿に押しつぶした。手首のピアジェが優雅なラピスラズリの青い光を放った。

——郷は、ツキの女神が自分の肩の上にとっかりと乗ってくる重みを感じた。これまでの勝ちちは、カジノの規模から見れば、雀の涙ほどの額でしかない。だがこれはほんの手始めだ。夜はまだ長い。徹底的にディーラーを叩

きつぶし、カジノの高額チップのすべてを、おれの前に積ませてやる。

郷は顔を上げ、無表情に彼を見つめているディーラーに、続けるよう顎をしゃくった。彼女が、カード台を引き寄せようとした時、背後から近づいてきた別なディーラーが、その肩を叩いた。

最初のディーラーは郷に会釈もせず、テーブルの中央から身を退くと、あらで新手と入れ代わった。ディーラーの交替はカジノ側の特権で、いつでも好きな時に代わることができる。

郷は、胃の奥にいやなしこりが疼くのをおぼえた。一人のディーラーだけを相手にできないことはわかっていた。とくに、ツイている客を引きずり下ろすために、ディーラーを代えるのはカジノ側の常套手段である。

それに乗せられない気構えはあったが、いとも事務的にそれが行なわれると、無視することはできなかったのだ。郷は歯を食いしばり、勝負への執着をよりあおることにつとめた。

新しい配り手は、このカジノには珍しいほどの美貌の

持ち主だった。国営カジノのためもあつてか、女ディーラーたちは、美人というよりは理知的な容貌の持ち主が多かったのだ——冷ややかに、切れ長の目を郷に向け、彼がチップを張るのを待った。

テーブルには、七つのボックスが白線でレイアウトされている。客は、一度にその二カ所以上に張らなければならない。金額の^{アップリミット}上、限はなく、^{コアーリミット}下、限は一カ所が五百ウォン以上とされている。

郷は、左端と中央のボックスに、十万ウォンずつチップを積んだ。女ディーラーは無表情のまますべてのボックスに二枚ずつ、伏せてカードを配り、自分の前にも二枚を配った。

郷は、チップを張ったボックスのカードをめくった。左端のやつは、クラブのキングにダイヤの九だった。絵札はすべて十に数えられるから、トータルは十九で、悪くない数だ。

中央のそれをめくった。思わず、心中にやりとした。ハートのクイーンにダイヤのエース。二十一である。最強に近いカードだ。ディーラーと充分に勝負できるだろ

う。

郷が、カードはこれ以上不要だという意思表示にかぶりを振った。ディーラーは自分の二枚をちらりと確かめると、カード台から一枚滑^{すべ}らせた。三枚ともひらいた。

——ハートの十、スペードの五、スペードの七。二十一オーバーで、いわゆる^{〃ドボン〃}である。

しかし彼女は顔色も変えず、手元のチップ箱から、二十万ウォンのそれを滑らせてよこすと、郷が次に張るのを待った。

郷はためらわず、最前と同じ位置に、チップを置いた。今度は二十万ずつ。押している時は倍々に賭けてゆくことが、郷の習慣のひとつになっていた。——すでにその時、郷の負けは予告されていたといつてもいいだろう。すぐれたギャンブラーは、けっして習慣をつくらないものだからだ。

カードが配られて来た。——郷はすばやくチェックして、わが目を疑った。左端のボックスがクラブの十にスペードの十で、二十。中央のボックスはハートのエースにダイヤのキングで、二十一。やはり申し分のない勝負

手である。どうやらツキは、金無垢のしろものになったらしい。

背後のギャラリーのどよめきを聞きながら、郷はゆっくりとかぶりを振った。ディーラーは、自分に配られた二枚を、裾をはじいてすばやくのぞいた。さらにカードを、引き出そうとはせず、その二枚を、ひらいた。

郷は凍りついた。目にしたものが信じられなかった。スピードのエースに、スピードのジャック。奇跡ともいえる手、ブラックジャックである。これに勝てる手は、存在しないのだ。

ギャラリーが、嘆声を上げた。無遠慮な手が、郷の肩を慰めるように叩いた。だが郷は、何も感じなかった。新しいモアを機械的にくわえると、チップをふたたびボックスに移動させた。

十分後、すべてを失って、郷は立ち上がった。正確には、一万ウォンのチップ一枚を心づけ代わりに残していた。

そのチップを、ディーラーの前に放り出した。

「楽しませてくれた。ありがとう」

韓国語で言った。しやがれた声が忌々しかったが、緊張の生理からは逃れられなかった。

「よかったら、あとで部屋まで遊びに来ないか、ライマソン・ホテルの十一号だ」

カジノのディーラーは、妓生ではない。一夜妻の求めに応じないことはわかっている。だが、捨て科白を浴びせたい気持ちを抑え切れなかったのだ。

女ディーラーは、微笑した。

「——ありがとうございました」

囁くように答えた。だがその目は、もう郷を見てはいなかった。

2

カジノ・コンチネンタルを出ると、夜風に吹かれながら郷は、だらだら坂をホテルへと下っていった。

漢江を見下ろす斜面に、五つのホテルが散在している。山荘ふうの簡素なホテルで、朝鮮動乱当時のアメリ

カ軍の將軍たちの名——ダグラス、メッチュウ、マクスウエル、ライマン、ジエームズの名が、それぞれ付けられている。

本来、このソウル南方、漢江沿いにあるウォーカー・ヒルそのものが、在韓アメリカ軍兵士の慰安のために設けられたリゾート地であつたのだ。その後拡張を重ね、ついに大小のホテルやレストラン、シアター、プールなども含む一大リゾート複合体に発展した。その中心たる国営カジノは、韓国に外貨を稼がせる有力な切り札とさえなっている。

最近、カジノの近くに立派な高層ホテルまでできて、日本からの団体客などはすべてそちらへ行つてしまう。昔ながらの將軍のファースト・ネームを持つ五つのホテルは、閑古鳥が鳴くとはいわぬまでも、ほどよく空いており、むしろ郷はその静けさが気に入っていた。

ジャケットを脱ぎ、薄いタートルネックのプルオーバー一枚になつていた。漢江から吹き上げて来る風が、火照つた頬に心地よかった。だが胸の内部の、どす黒い熱気は、いっこうにおさまりそうもなかった。

カジノの一角にあるバーで、ジャック・ダニエルのオンザ・ロックを三杯、立てつづけに流し込んだ。日が暮れてからホテルに着き、シャワーも浴びずにカジノに繰り込んだので、満足な夕食も摂っていない。しかしいっこうに腹は空いていなかった。

賭けのスリルにふけたあとは、いつでもこうなる。興奮がいつまでも中枢神経に残り、その残り火のほむらが、胸の隅々までを煽り立てる。アルコールが、その火を消し切れないことはわかつていた。神経と大脳皮質の興奮を別な道へ切りかえることが必要だったのだ。

しかし焦ることはない。夜はまだ長いし、フロントへの電話一本でことはすむ——賭博場と女、それは塩とコショウのように対になった存在だ。どちらが欠けても、一夜の完璧な娯楽は失われる。ウォーカー・ヒルではそのための心配りは行き届いていた。

退屈を持て余しているらしく、仏頂面のフロントから鍵を受け取ると、氷と水を運ぶように命じて部屋へ向かった。部屋は、一階の奥である。

——入ると、ジャケットをベッドに放り投げ、靴を脱

ぎ捨てると、窓際のソファに体を沈めた。

血走った目が、一瞬虚ろになった。賭打が、自分の病であることはわかっていた。今晚の損で、今度の旅の稼ぎのなかばが、吹っ飛んでしまった。さらに気をゆるめていけば、全部を持って行かれてしまったかもしれない。——だが病が病たる所以は、それをたやすくは止められないことだ。

モアを一本、ゆっくりと灰にした。心の昂ぶりがわずかにおさまり、シャワーを浴びる気持ちの余裕が出てきた。

立ち上がった時、ドアがノックされた。あけると、ボーイが氷とグラスの載った盆を持って立っていた。チップを五百ウォンやって、盆を引き取った。

スウェーターと下着を乱暴に脱ぎ捨てると、浴室に入った。ホテルの他のすべての部分と同様、そこもくたびれかかっていたが、湯栓をひねると、少なくとも熱い湯は出た。

熱い湯と水を交互に浴び、バスタオルで体を拭くと、意識の壁に窓があいたような気分になった。体中に浮い

た脂のぬめりが拭われ、体が軽くなったような気がした。

バスタオルを体に巻きつけて浴室を出、ベッドの上に置いてあったマーク・クロスのスーツケースをあけた。替えセーターに包んであったマーテルの瓶を取り出した。——寝酒用に、一本は必ず持ち運ぶことにしている。

グラスに氷を放り込み、ブランデーをたっぷり注いだ。ひとくち含むと、まったりと芳醇な味がくちいっばいにひろがった。さらに呷りかけた時、ドアがふたたびノックされた。

舌打ちした。さっきのボーイが、女でも売り込みに戻って来たのだろうか。

ドアをあけて、郷は立ちすくんだ。トレンチコートを羽織り、ショルダーバッグを下げた女が立っていた。カジノのディーラーの、レモンイエローのブラウスとミニスカートの制服が、コートの前からこぼれて見えた。そのほっそりした姿態と、繊細な鼻筋に大きな瞳を持った細面の貌に見覚えがあった——最後に郷に煮え湯を飲ま